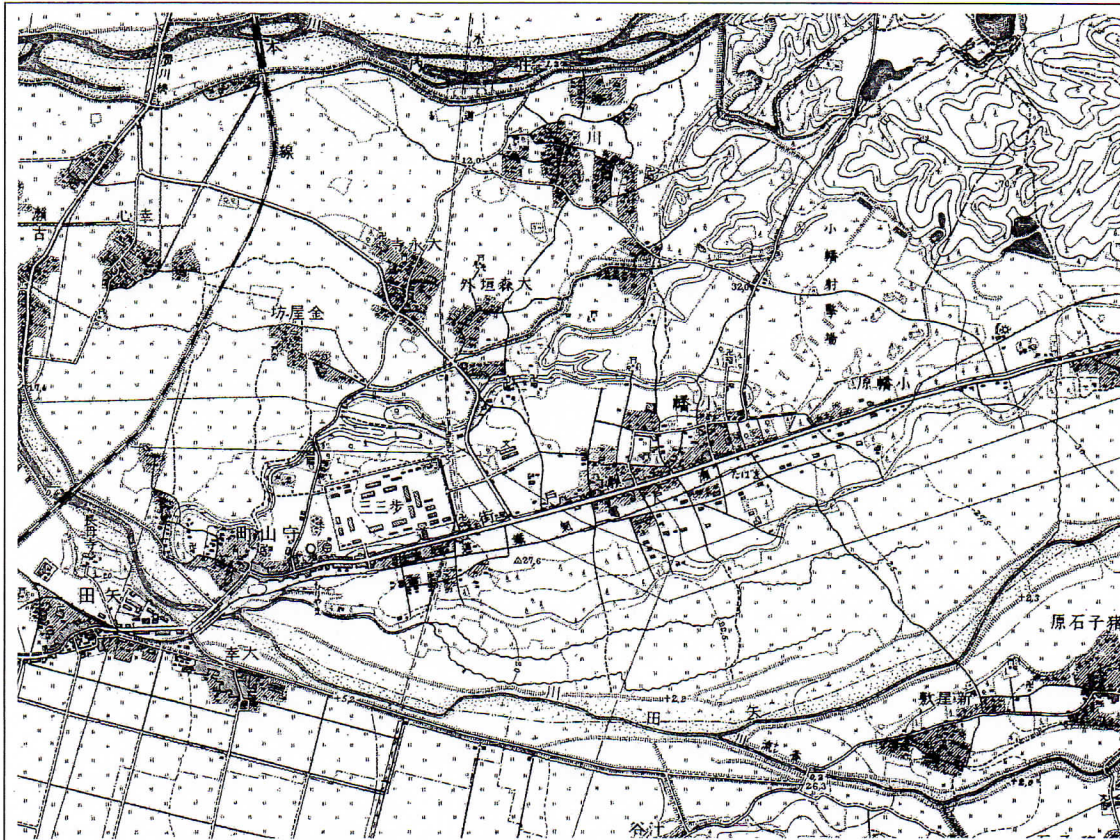


楽しくブラオワリ 地図を片手に歩く名古屋今昔

小幡城から守山城へ

杉野 尚夫

大正9年地形図



コース概略

名鉄瀬戸線小幡駅改札口→小幡演習場跡→長慶寺→生玉稻荷神社→小幡城趾→瓢箪山古墳→陸上自衛隊守山駐屯地→守山生涯学習センター→白山神社→守山城趾→名鉄瀬戸線矢田駅(約6km、2時間)

[illegible]

20

瓢箪



1 守山城と小幡城

最初に守山区の地形について見よう。守山区の最東北端にある東谷山から西南へ向かう丘陵は、庄内川と矢田川に挟まれて次第に狭まり、長母寺を先端として終わる。ゆるい丘陵は途中で広大な小幡台地を形成しており、ここに飛行学校が設置されたこともある。

この丘陵地には先史時代から人の生活の場が多数あり、古墳など多くの遺跡が各所で確認されている。

戦国時代になると、こうした地形から各所に城郭や砦が築かれてきた。それらの中で、全国的に有名になったのが、守山城と小幡城だ。

守山城の築城年代などはよくわかっていないが、天文4年（1535）の「守山崩れ」で全国に知られるようになった。

徳川家康の祖父にあたる清康は13歳で家督を継ぎ、瞬く間に三河統一を成し遂げた。このままの勢いなら全国統一すら夢でないという逸材だったという。清康25歳の天文4年、尾張攻略のために大軍を率いて守山城周辺に進軍したが、この陣中で全くの誤解から家臣阿部正豊に殺害されるという事件が発生した。松平軍は崩壊し、三河はまたもとの状態に戻ってしまった。これが守山崩れである。

この後守山城には織田信長の叔父の信次、弟の伸時が城主となるが、桶狭間の戦いの後、廃城になったといわれる。松平氏が三河を再び統一するのは、永禄9年（1566）、孫の家康によってであり、清康の死から31年後のことである。

なお『三河物語』は守山を「森山」と、『信長公記』は「守山」と表記しており、両方が使われていた。

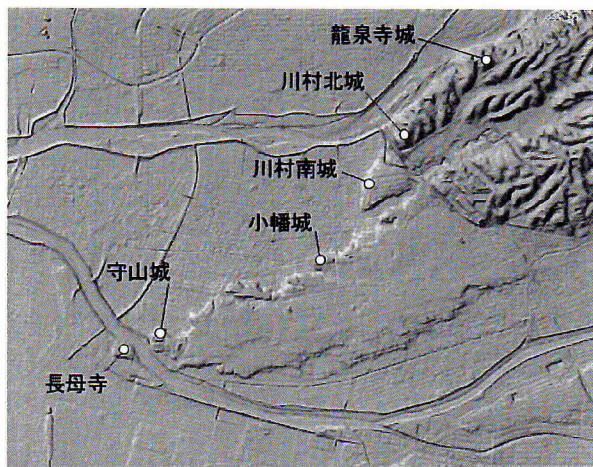
矢田川右岸、矢田川橋のすぐ北の丘の上に守山城址の石碑が建っている。その南には宝勝寺があり、この一帯も城の一角だったらしく、城趾碑のある丘と宝勝寺墓地の間には堀があり、ここが本丸と二の丸の境目と考えられる。

小幡城は、大永2年（1522）織田敏信の家臣岡田重篤が築城したといわれている。その後、とくに歴史の場に登場することなく桶狭間の戦いの後廃城になった。

天正12年（1584）小牧・長久手の戦いの際に、徳川家康が小牧と岡崎を結ぶ線上の拠点の一つとして修復した。岡崎城を奇襲しようとする池田恒興らの動きを察知した家康は、池田軍を追尾して小幡城に滞陣し、両軍は城の東南にあたる長久手で激突、池田恒興、元助父子、森長可を討ち取り徳川軍が勝利する。

このあと家康の本隊は小幡城に入り、夜になって小牧山へ引き上げた。敗報を聞いた秀吉は、2万の大軍を率いて小幡城を攻めるため龍泉寺まで来たが、家康のあざやかな撤収ぶりに感嘆したという。

小幡城の痕跡は今日まったくない。小幡城は、北西にむかって突き出した高台の先端に



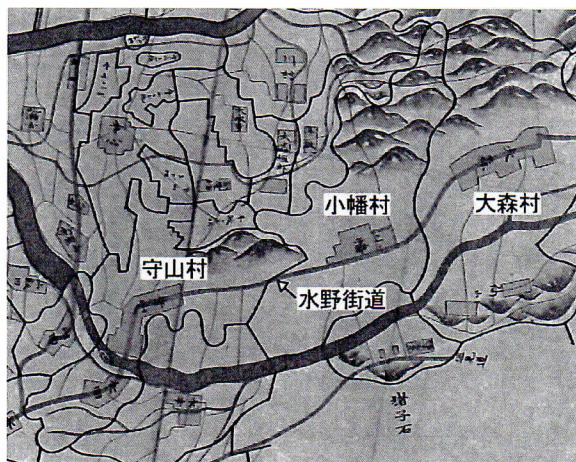
立地しており、城趾とされる場所には「守山ケアコミュニティそよ風」という立派なビルが建っている。その北側の崖は高低差が10mほどあり、要害の地という印象を受ける。

この少し東に阿弥陀寺というこぢんまりした寺があるが、この寺の山号が「城趾山」というのがおもしろい。

2 復活した「守山」

7～8世紀ごろ、小幡に二つの小幡廃寺があったといわれる。二つの寺はかなり近い場所にあり、同時に存在したのか、あるいは時代的に少しずれているので、片方が廃寺になってもう一方が新たに造営されたのかもしれないという。いずれにしても小幡がこのあたりの地域の中心であった根拠となっている。

江戸期には、水野街道（大曾根から定光寺・瀬戸へ通じる）沿いに守山村、小幡村、大森村が東西に並ぶが、規模的には大森村がもっとも大きく、次いで小幡村で、守山村はもっとも規模の小さい村だった。『尾張徇行記』に、守山村は貧村と書かれている。いずれも純農村だったが、街道沿いには若干の商家もあったようである。



守山村には、明和4年（1817）に大きな出来事があった。長母寺の南側を流れていた矢田川が、長母寺と守山城趾の間を突き破り、現在の矢田川の位置に移動した。明和の瀬替えである。この瀬替えで、長母寺だけが矢田川左岸に取り残された。守山村の飛地となった長母寺は、明治9年の地租改正の際に、守山村から切り離され矢田村の区域となった。

明治22年に守山村、川村、金屋坊村、大永寺村、大森垣戸村の5か村が合併して二城村となり、守山の名は消えた。当時は、合併に際して、旧村名のどれかを用いるのではなく、新しい名前をつけるようにという指示があったようで、新規の名称が選ばれた。二城の由来は、この地域に守山城と川村城の二つの城があったからだという。

明治39年7月16日に高間村、二城村、小幡村、大森村が合併し、守山町が誕生した。4か村の中では「小幡」がもっとも有力とされていたので、町名、役場の位置については議論が沸騰したらしい。そうした中で、消えていた「守山」がなぜ新町名となったのか。

当時、守山には歩兵第33連隊があり、日露戦争で活躍し、その戦勝の熱気がさめておらず、瀬戸街道沿道は連隊の関係から発展、賑わいをみせており、新しい町の役場位置に選ばれ、新町名となったといわれている。

なお、守山町は昭和29年に志段味村を合併して守山市となり、昭和38年に名古屋市に合併、守山区となった。江戸時代にそれほど有力な村でもなかった村の名が、区名にまで「出世」したのである。ということは、もし歩兵第33連隊がなかったら、現在の守山区は小幡区となっていたのかもしれない。

余談だが、滋賀県にある守山市は、中山道守山宿の宿場町から発展し、守山町となった。長い間、二つの守山町が存在したが、愛知県の守山市が名古屋市の合併した後の昭和45年に守山市になったため、二つの守山市が同時に存在したわけではない。

3 悲劇の歩兵第33連隊

日清戦争後、日本はロシアの脅威に直面することになり、明治29年、一大軍備拡張を敢行した。名古屋の第三師団は歩兵2個連隊を増設することになった。東海各地では連隊誘致運動が起き、二城村の村長野村賀真は、地域の発展のために連隊の誘致を決意し、自分の所有地のほとんどを兵営敷地に寄付した。これにより歩兵第33連隊は守山に決定した。

歩兵第33連隊は、名古屋城内の歩兵第6連隊内で第一大隊（4個中隊600名）を編制、明治30年8月守山に移駐した。この日、沿道の各家は国旗、提灯を掲げ、矢田川橋と営門前の二か所にアーチを設け、東春日井郡長、郡村会の各議員、附近の小学校の職員生徒、村民まで沿道に出て歓迎したという。

このあと、守山で、第二、第三大隊を編制、明治31年連隊創設を完了した。翌年3月24日、軍旗が下賜され、以後毎年この日に軍旗祭を挙行し、一般の人々にも営内の観覧を許した。

連隊の駐屯以後、連隊営門から矢田川橋にかけての瀬戸街道沿道は商家が軒を並べ、軍旗祭ははじめ入営、除隊、面会など多くの人が連隊を訪れることになり、野村村長の期待どおりに守山は発展していった。

明治37年、日露戦争が開戦すると、歩兵第33連隊は第2軍に属し鎮南浦に上陸、南山、得利寺、蓋平・大石橋、遼陽、沙河、沈旦堡などの激戦にかかわり、590名の戦死者を出し、三軒家では連隊長はじめ801名の戦死者を出した。負傷者も延べ3345名に達し、連隊は壊滅状態になった。

明治39年1月、第33連隊の残存部隊は、軍関係者、住民、学校諸生徒らの大歓迎の中、守山に凱旋した。この直後の7月に発足した新しい町の名前が守山となったのは自然な成り行きといえよう。

大正14年の宇垣軍縮で第33連隊は第3師団から第16師団に所属が変更され、三重県久居へ移駐した。その後には昭和3年騎兵第3連隊が名古屋城内から移ってきた。騎兵第3連隊は、その直後に発生した済南事件に出兵、以後満州事変を経て日中戦争と続く中で、出兵を繰り返し、大陸各地を転戦、その間守山には補充隊が残留した。

補充隊は昭和20年4月解隊し、その後には名古屋城内にあった砲兵補充隊が移駐し、終戦によって解隊、兵営は閉鎖された。

久居へ移駐した歩兵第33連隊は、その後昭和4年に奉天、昭和9年にチチハルに駐屯、昭和12年の上海事変には天津、石家荘、常熱、無錫などの戦闘を経て南京攻略に参加した。ここで南京虐殺にかかわった可能性がある。その後中国各地を転戦して昭和14年に帰還。

昭和16年太平洋戦争開戦とともにルソン島に上陸、フィリピン各地を転戦し、昭和19年9月、レイテ島に移駐、アメリカ軍の上陸作戦に抵抗し、10月23日、軍旗を奉焼した後、挺身切り込みにより玉碎した。悲劇の連隊となったのである。

5 守山から小幡へ

戦後、連隊の跡は米軍に接收され昭和20年11月米軍が駐屯、第五空軍司令部となった。米軍が撤収後の昭和34年、陸上自衛隊第10混成部隊が移駐。現在は第10師団司令部、第35普通科連隊、第10通信大隊などが駐屯している。

いずれにしても、守山には明治30年以来ほぼ切れ目なく、名称は変われども軍隊が駐屯し続けているのである。歩兵第33連隊が駐屯していた頃は、その存在がまちの賑わいを支えていた。今日では、鉄条網の塀に囲まれた、大面積を占める自衛隊の駐屯地がまちの発展にとって大きな障害になっているように思える。

その一方で小幡ヶ原は大きく変貌した。戦後、小幡ヶ原は緊急開拓用地として国の指定を受け、守山町が町内希望者に開墾をさせることになった。開墾希望者はわれ先に丘陵や周辺の樹木を伐採し、適地を求めて蚕食的に開墾をすすめた。

昭和23年、この土地が各個人に売り渡されることになり、開拓不適格者が整理され、入植者、増反者も区分された。引き揚げ者と復員者を中心とする土地のない者18名に県の入植許可証が与えられた。その後の追加入植者を加えて、定着農家は22戸となった。

入植者への耕地配分面積は1戸あたり平均1.1ha、増反者は330戸で一戸あたり0.1haだった。

昭和40年代になると都市化が進行し、このあたりの住宅地としての立地条件のよさから地価が高騰し、土地を手放す入植者が急増し、急速に住宅地化が進行した。

この開拓地のうち10haは守山東中学校、小幡小学校、守山区役所、県営住宅などに割り当てられた。守山区役所は昭和46年に竣功し、守山から小幡へ移転した。旧守山区役所の建物は守山図書館として翌47年開館した。

小幡ヶ原の北部一帯はアメリカ軍が利用していたが、昭和32年に米軍の撤退にともない、北側の2万坪は守山市に、南側の3万坪は自衛隊に払い下げられた。

この自衛隊用地は現在自衛隊訓練場として利用されているが、これが小幡演習場の名残といえよう。

守山区役所南西交差点の南西角の喫茶店の庭に「陸軍省所轄地」と書かれた境界杭がある。この位置は龍泉寺街道の西側であり、演習場は街道の東側であったはずで、この杭は後に移動されたものらしいが、数少ない小幡演習場名残の物件である。



このような小幡ヶ原の住宅地化と区役所の移転にともない守山区の中心が守山から小幡へ移りつつあったが、昭和55年、昭和63年策定の名古屋市基本計画においても小幡地区は地域中心商業地と位置づけられた。

しかし、小幡地区は駅前広場も道路等の公共施設も未整備であり、古い木造家屋も多く、店舗、住宅が混在密集していた。このため、名古屋市は小幡地区総合整備をすすめることになった。その中で、駅前を整備する市街地再開発事業は平成4年都市計画決定され、広々とした駅前広場と再開発ビル（アクロス小幡）が平成11年完成し、守山区の中心市街地の玄関口ができあがった。

6 鉄道と守山の駅名

現在、守山区内に「守山」の名称を含む駅は三つある。

「守山自衛隊前駅」は、明治38年4月2日、瀬戸自動鉄道の「聯隊前駅」として開業した。昭和16年に「二十軒家駅」に改称したが、軍事施設の所在地をわかりにくくする防諜上の配慮。昭和21年「守山町駅」、昭和30年「守山市駅」、昭和41年「守山自衛隊前駅」と実に5つ目の駅名である。

平成13年の1日平均乗降人員2488人で、瀬戸線20駅中18位と利用者がきわめて少ない駅である。ちなみに、小幡駅は1万2577人で第4位になっている。なお、1位から3位は栄町駅、大曾根駅、大森駅である。

駅名に「自衛隊」がつくのは、札幌の地下鉄にずばり「自衛隊前駅」がある。これは陸上自衛隊真駒内駐屯地の最寄り駅である。

昭和33年3月、守山市は中央線守山駅誘致委員会を設置、駅誘致の運動を開始した。以来6年の歳月を経て昭和39年4月1日、「新守山駅」が開業した。この時点で、名鉄瀬戸線に「守山市駅」があり、滋賀県に「守山駅」があったため、「新守山駅」の名称となった。この駅名がその後の付近の町名に影響し、新守町、新守西、新守山などの町名がつけられた。ところがこれらの町は、かつての守山村とは違う場所である。

こうした中で平成13年に開業したガイドウェイバス志段味線に、ずばり「守山駅」が設置された。この駅が、かつての守山村の中心にもっとも近い駅である。

[参考]

守山白山古墳

小幡原から西へ延びる洪積台地が、矢田川へ突き出たその西端にある前方後円墳で、矢田川を挟んで名古屋台地を圧するような位置に築造されている。

墳頂は前方部とも平坦にならされ、後円頂に白山神社が祀られ、かなり変形されているが、墳丘の裾部分は旧状をとどめている。

全長95m、後円部径55m、同高さ5m、前方部幅35m、同高さ3m余で、前方部の細く長いいわゆる柄鏡形に近い古式の形態をもつ前方後円墳である。前方部頂上から土師質円筒埴輪が採集されており、4世紀末から5世紀初めにかけて、名古屋北部から守山地域を支配した豪族の墳墓と推定される。墳丘全域が神社境内地となっている。

(『名古屋の史跡と文化財』より)

守山瓢箪山古墳

小幡原台地の南部に単独で存する前方後円墳である。前方部を北西に向けた2段築成の墳丘は全長63m、前方部幅58m、後円部径36mである。現在まわりは平坦になっているが、かつては周濠が回っていたという。

かつて所有者により、後円部の一部が発掘されたというが、主体部は手つかずで良い状態のままで残っているものと思われる。墳丘のあちこちや裾のあたりで土師質の埴輪の破片が採集できる。

前方部の幅が後円部の径よりも大きい前の開いた形状や、高さも後円部よりも高いといった特徴は、この古墳が古墳時代後期に属することを示しており、採集される埴輪の製作技法からみて、5世紀末か6世紀初頭に築かれたものと考えられる。

小幡原の前方後円墳の中でも状態は最も良く、現状では埋められているものの周濠も残っていることが確実であって、古墳群のかつての姿をしのばせるものとして重要である。

市指定史跡となっている。

(『名古屋の史跡と文化財』より)

長慶寺

山田荘領主山田太郎兼継は、寛元二年(1244)11月2日に没したのであるが、その菩提をとむらうために、弟の山田二郎正親が、南山士雲を開山に迎えて建長(1249~56)ころに創建したと寺伝は述べている。『張州府志』には、山田重忠が父、母、兄のために長父寺、長母寺、長兄寺を建て、長兄寺を長慶寺に改めたと記されている。南山士雲は、長母寺に住した無住一円の法嗣であり、鎌倉建長寺の20世、京都東福寺の11世となった名僧である。建武2年(1335)入寂。本尊は聖観音であり、薬師如来像もあり、由緒寺院である。昭和13年5月1日に、寺の西方の墓地から出土した一字一石経を境内に埋納しているが、これも南北朝時代のものといわれて価値が高い。

(『名古屋の史跡と文化財』より)

小幡城跡

矢田川・庄内川に挟まれた地域のほぼ中央に位置する小丘上に築かれた平山城。東西110間(198m)・南北40間(72m)、二重の堀をめぐらしていた。大永2年(1522)岡田重篤(一説にはその子重頼)の築城と伝えられる。天文4年(1535)には、岡崎の松平清康が織田信秀攻略のため尾張入りしてこの城に駐したが、守山城で殺された。この後岡田氏は信秀方に属し、当城は信秀の弟信光の居城となった。以後一時廃城となっていたが、天正12年(1584)の小牧・長久手合戦に際し、徳川家康がこの旧城を修復して本多広孝らに守らせ、巧妙にこれを活用する作戦に出て秀吉軍を翻弄した。同年12月には菅沼定盈が代って守ったが、合戦の終焉に伴い再び廃城とされたという。

(『名古屋の史跡と文化財』より)

守山城跡

矢田川北岸の小丘上に築かれた平山城。『張州府志』によれば、東西32間(約58m)、南北28間(約50m)、周囲に一重の堀をめぐらしていた。現在堀の一部を残している。築城年代創建者ともに不詳。大永6年(1526)連歌師宗長がこの城を訪れ、連歌会が盛大に催されたことが『宗長手記』に記されている。これによれば、時の城主は松平信定で、連歌会は新地の知行の祝言であり、清須より織田一族、守護代坂井摂津守らも招かれていたという。天文4年(1535)松平清康がいわゆる「守山崩れ」でこの城に倒れてのちは、織田孫十郎信次が在城したが、永禄3年(1560)の桶狭間合戦ののち廃城となったとされている。現在曹洞宗宝勝寺が建つが、この寺は寛永14年(1637)大永寺の7世大溪良沢が清康の霊を弔うため城跡に建立したものと伝えられている。